

Title	社会的孤立の病理：共生の欲求の精神分析的メカニズム
Sub Title	Pathology of social isolation psychoanalytic mechanism of symbiotic need
Author	鈴木, 真一 (Suzuki, Shin-ichi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1967
Jtitle	哲學 No.50 (1967. 3) ,p.213- 228
JaLC DOI	
Abstract	This paper on "Symbiotic Need" (human gregarious) as analysable and absolute is composed of two fundamental assumptions in psychoanalytic view. First, that the ultimate biological reservoir of energy is discharged via two major systems of activities : the social and the sexual systems. Admittedly the level of specificity on which this duality of basic drives rests, is arbitrary and its justification is sought by regarding it to be a workable classification for the purposes of a sociological study. Secondly, in adherence to my main theme, "Symbiotic Need", I consider whether one of the two basic principles of life, the Principium sociale, has been treated by cultural man in a manner which is consistent enough to be recognized as a trend with a specific direction. It was stated that in the course of history the social principle of life has been subjected to an increasing frustration which has not been warranted by the necessary processes of differentiation and individuation.
Notes	第五十集記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000050-0222

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会的孤立の病理

—— 共生の欲求の精神分析的メカニズム ——

鈴 木 真 一

社会の紐帯を心理面から促える初期の立場としては、1910年代から1920年代にかけて、アメリカ・イギリスに出現した本能心理学があげられる。たとえば、マクドゥーガルがあらゆる社会行動の説明原理に本能概念を設定し、トロッターは集合感情 (gregarious feeling) にかえる衝動 (impulse) が本能の価値をもって精神のなかにあらわれることは明らかであるとした。

むろん、その後、学習効果を重んずる条件反射に基く行動心理学からの批判、あるいは、いわゆる『本能』が複雑な習慣形式によるとする社会学理論のアプローチ、これを支持する文化人類学の資料、そして、動物心理学が従来の本能か、獲得された行動かという二分法の危険を避けて、遺伝因子と行動関係、行動の発達過程を左右する要因の分析に集中する傾向により、現在ではいわゆる『本能心理学』が清算された古典的な残滓と見做されるに到っている。しかし、古典のアプローチのもつあらゆるものが否定されるわけではないし、とくにその基本的洞察は精密な方法論的技法を超越して、最新の研究に暗示的な課題として導入されることは珍らしくない。たとえば、トロッターの『群居する種ぞくの個人が真に独立し、自足することはありえない。自然淘汰は、ひとの思考が複雑になるにつれて、しだいに抽象的に表現されるようになる不完全さの感覚をいつももたねばならないようにしむけられた。これは宗教感情において、すなわち、完全

さ・神秘的結合・無限との合一に対する願望において出現する心理である。』という叙述のなかに、いわゆる『本能』概念のなかに包みこまれる以上の深層心理に対する洞察を見出すことができる。ただ彼は人間関係の情緒 (emotion) に対する渴望を何か深層心理から発するそれ以上の基本的な、究局的な性向の、ないしはその病理的影響の現われとは見做されなかった。彼は人間の集合性をそれ以上に分析することは不可能だし、それ自体、絶対的なものと考えたに止まった。

人間の孤立的環境から受ける精神機能の影響については、それほど多くの例はないが、幾つかのケースがある。極端なよく知られている事例として、自然の障壁によって長期間あらゆる社会的接触から隔離され、奇蹟的に生存したといわれるインドのオオカミ少年とか、アヴェロンの野生児があげられる。またこのような極限状況に近似する経験について、単独の極地旅行、冒険旅行を試みたひとびとによって報告される。しかし、この種の報告者たちの大部分は、むしろ自己の異常な経験のもたらす精神機能を客観的に観察するにふさわしい専門の精神医学者ではなかったし、その上、この報告は実際の経験後かなりの時間がたって書かれたものである。この精神病理的知識に欠けていること、時間的ずれとは、孤立の状況に関する正当な評価を困難にしている。独房に監禁されている囚人も同様に孤立の極限状況に置かれている。囚人は視覚的・聴覚的幻想に襲われ、ときには、味覚的・触覚的幻覚が生ずる。精神医学上、拘禁反応あるいは拘禁精神病といわれるものがそれである。したがって、囚人にとって人間的接触を剝奪された独房への拘禁はかつてもっともきびしい処罰の一つであったし、かなり反抗的な囚人もこのような処罰を与えると、数日間でまったく従順になってしまうという。

以上のケースは、むしろ好んで孤立の状況にひとが身をおいたのではなく、強制された拘禁の、あるいは冒険という自発的行動の結果として不可避的に異常な孤立感を体験したのである。

次の事例は1954年、カナダの精神医学者 W・H・ベックストン、W・H・ハーソンなどによって孤立の状況に近い実験装置を設定し、孤立前・孤立後の被験者の受ける心理的・感覚的影響を比較して綿密に検討したものである。

この実験は『成人における感覚はく脱のテスト』と呼ばれるが、人間関係からの分離はむろんのこと、これ以外に、とくに外部からの刺戟を受け入れる感覚を作為的に妨害する操作に重点がおかれたのである。小論でとくにこの実験例を引用するのは、外部の刺戟に対する感覚的妨害の操作は、外部との交流を遮断することになるから、被験者の受ける孤立感をさらに強化するはずと考えたからである。

この実験では、マッキギル大学の男子学生たちが被験者になったが、彼らは食事と便所に行く時間を除いて、つねに照明のある個室に入れられ、気持のよいベットに横たわるようにされた。半透明のプラスチック製のマスクをつけ、そのため拡乱した光線を受けつけるが、事物の形態をそのまま明確に捉えることができないように被験者の視覚が制約された。耳をおおうようなやわらかいフォーム・ラバーのまくらが音を遮断した。温度調節機と扇風機の断え間のない雑音が小さな物音を消していた。皮膚感覚は木綿の手袋と指の先端までかくす長いボール紙の袖口をつけて妨害された。

学生たちは、この実験に参加するに当って、一日20ドルという高額の日当を支払われたし、大部分の学生は、実験期間中のテスト以外のブランクの時間を利用して、各自の研究について思索しようとした。だが期待に反して彼らの実際の経験は一定の時間、一貫した思考を持続することができなかった。孤立前・孤立・孤立後、それぞれの状況のもとで数多くの心理テストが実施されたが、この孤立中の被験者たちは、ほとんどあらゆるテストにわたって思わしくない成績に終わった。そして興味深い発見は被験者たちが超自然現象の存在についての思念に敏感になったことであった。

社会的孤立の病理

数日間わたる孤立の実験後、多くの被験者は『幻影』をみた。ある学生はくり返して樹のかげに横たわる岩を、ほかの被験者は『赤ん坊たち』の姿をみた。この孤立の実験はメスカリン（サボテンの一種）のような麻酔剤を飲んだのとまったく同じような幻覚に誘いこんだのである。幻影は、はじめは線とか三角形のような比較的単純な形態をとり、それが次第に複雑になり色彩をおびるようになる。幻覚現象はいきいきとして持続し、心理テストの実施とか睡眠をしばしば妨害した。

また孤立の状況から離れた後も、被験者たちは視覚上の歪みを訴えた。事物が歪んでみえ、近くのものやたらに大きく、遠くのものや極端に小さく見え、また動いているように思われた。ときには部屋全体が動いているように感じられ、事物が形と大きさを変えたといわれる。

このような極限的な孤立にひとが置かれることはまず稀である。だが情緒剝奪の程度がどのようなものであれ、その結果は基本的性向 (fundamental needs) が侵害されることに変わりはない。

しかしこの性向とはいったい何か。人間の情緒的反応を求める社会的欲求については、精神分析派によってヨリ基本的性向からの剝奪と解釈されている。たとえば、集合性はヨリ包括的な性的リビドの昇華 (sublimation) あるいは代置 (displacement) と見做された。むろん、このような昇華とか代置とかは精神分析の臨床経験によって十分に示されるという。だが、この場合、なぜ社会的飢餓 (social hunger) が抑圧によって現われるか——昇華されるのかそしてあらゆる集合性が社会化された性的リビドであるか——代置されるかどうかの疑問が残る。

しかし、フロイド自身はリビド理論が集合行動の領域にまで拡張解釈されるを許していない。彼の『集団心理学と自我の分析』のなかに次のような叙述が見出される。

『同一視は他人に対する感情結合のもっとも初期の表現として、精神分析によってよく知られている。これはエディプス・コンプレックス以前の

生活史でひとつの役割を演じている。幼い男の子が父親に対して特別の関心をあらわすことがある。つまり自分も父親とおなじようになりたいし、またそうになりたい。すべての点で父親のかわりになりたいという関心である。客観的にいうと彼は父親を理想とするのである。この態度は父親（また男性一般）に対する受動的な、あるいは女性的な心構えとはなんらの関係もなく、むしろすぐれて男性的なものである。それはよくエディプス・コンプレックスに調和していてその準備をすすめるのである。』

以上の見解からも理解されるようにフロイドにとって、同一視は何らほかからの情緒的連りから派生されるものでなく、それは第一次傾向もしくはメカニズムとされていることは明らかである。さらにフロイドは続けて、同一視は抑圧されなければならない対象選択に移行し、抑圧の解決として『退行の道を避けて、同一視はいわば対象を自我に取り入れることによってリビドの対象の代用物になる』という。これは『第三次的同一視』と呼んで差し支えないであろう。そして最後に彼は『第三に同一視は性的衝動の対象ではない他人とのあらたにみつけた共通点のある度びごとに生じうる』とつけ加える。第二次的同一視を『防衛的メカニズム』と第三次的同一視を『昇華』として構成し直すことは困難ではないし、事実、精神分析派はこのような解釈を試みている。両者とも性的リビドによってつくられ、操作されると説明される。

しかし、第一次的同一視のエネルギーとは何か。フロイド自身これについては言明を避けている。第一次的同一視についても、第二次的・第三次的同一視にフロイドが分析を試みたと同じようにリビドに関係づける解釈をとることができるであろうか。とすれば、何故エディプス期以前に息子が父親を畏敬し、模倣するとき、いったいどんな命令に従うのであろうか。『性的リビド』が単一の、しかも包括的な『生活力』を意味しない限り、第一次的同一視はリビド理論に適合されない。むしろ、このような広い意味が志向されていたとすれば、フロイドに浴せられる非難の一つであ

る『性的』という形容詞が無意味になるばかりでなく、それ自体誤まった概念になる。

第一次的同一視に関する私の解釈はE・フロムの共生 (symbiosis) の概念を借用することから始めたい。フロムは『心理学的意味における共生とは、自己を他人と（あるいはかれの外側のどのような力とでも）、おたがいに自己自身の統一性を失い、おたがいに完全に依存しあうように、一体化することを意味する。』あるいはトロッター流に表現すれば、いわゆる『群居本能』のメカニズムとして、種属との同一視、種属への結合、むしろ再統合に対する衝動といってもよいであろう。共生の性向はひとがこの分離的存在の世界にほうりこまれることに対する、そして孤独、あるいは別離というこの上もない負荷を課せられたことへの無力な、不安に満ちた小児的な抗義と解釈できよう。O・ランクが同一視は、『それ自身が統合への手段であることを示し、全体に到達しようとする企てである。』と語る時、まさしくこのメカニズムに触れている。『誕生の外傷』(birth trauma) の経験は誕生が子どもにとって種属の代表と目される母親へのこの上もない確実な依存の終着に当面することであり、あるいは絶体的分有、完全な参加という、出生以前の生活（子宮内）の終末を悲劇的に象徴するといわれる。幼児は食べもの、安らかさ、温かみが生物学的確かさをもつ子宮内の世界（子宮内存在）から離別して、冷く雑々しい不安なこの現実の世界にほうりこまれる。E・フロムはこの間の事情を臨床面と結びつけて次のように語っている。『精神病理学では、すべてをつつむ母親の胎内から離れるのを拒否する現象の十分な証拠が見出される。もっと極端な形では母親の胎内に帰ろうとする渴望がある……。こういう人物の行動では人生への恐怖や、死を求める強い魅惑があることに気がつく。死を憧れる空想は胎内へもどることであり、母なる大地にもどることである。』しかし、むしろ胎内からの空間的離別も母親との実質的な分離を意味しない。子どもと母親との間のきづなは、自然のきづなのうちでもっとも基本的な

ものである。子どもは母の胎内で生を受け、どの動物よりも長い間、ここに生存するが、生後も肉体的にはあい変わらず無力で完全に母親との密着した身体的接触、授乳などは子どもが失われたものとの再結合への渴望を温かいやすことのできるもっとも身近かで確実な存在である。母親は食物であり、愛情であり、暖かさであり、世界なのである。この母親から分離されるとすれば、乳幼児のショックは最高頂に達し、いわゆる衣・食・住がもっとも快適な衛生条件で保証されても母性的授乳 (motherly nursing)、母性的人物 (motherly person) との甘美な身体的接触を日々経験しなければ栄養失調で死んでしまう。いわゆる『ホスピタリズム』(hospitalism) の症例がそれである。

エディプス期以前の父親に対する第一次的同一視は、その実、共生の性向の、すなわち母親だけに向けられる失われた種属的結合に対する渴望の単なる拡張にすぎない。種属的結合からの剝奪を性的リビドのフラストレーションと見做して得られるものはない。この段階で、子どもはなお種属を代表する母親という身体から乳離れしないし、母親に密着し続けているが、これは子どもがまだ『自己を認めていないし、克服し難い分離を知らないからである。』

イギリスの精神分析派によると、たとえば S・アイザックスは『子どもは幻想のなかで母親の乳首と乳房を呑みこむだけでなく、母親そのもの、そして父親そのものを彼の内部に呑みこもうとする』という。そして、このような『呑みこみ』(gobbling up) という幻想は決してナンセンスな比喩に止まるものでなく、食べたり、飲んだりすることなどは、合体すること、すなわち、主体と客体、あるいは他の主体と合体するのにもっとも効果的な手段であるという。とすれば、誕生後、子どもと人類とのもっとも切実な身体的連りは、子どもの栄養摂取という欲求によって、口唇的連り (oral link) によって確保される。たしかに我々は人類学者の報告のなかに未開社会では、家族の甘美な涙と愛情こめた追憶のただ中で祖父が食べ

られたり、戦場の勇士の心臓を食べ尽せば、彼の勇気を自分のものにする
ことができるという奇妙な信念に出会う。この未開社会の食人のケースと
文明社会の哺乳・摂食は種属的結合ないしは共生の性向の口唇的象徴と見
做してよいであろう。

だが、イギリス精神分析派理論にふくまれている先天的サディズムの想
定には疑問がある。結合への渴望に伴う攻撃性は結合を達成する手段であ
り、これから独立するものではない。それに対し食人的風習はそれがフラ
ストレーションによって緊張しているから、ヨリ明白に攻撃的である。こ
の二つの攻撃性のタイプの相異は明瞭である。第一の攻撃性は、それが食
べもののそしゃくや、呑みこみの行為に随伴しているから、まさしく生物
学的に必要であるものとして手段的であり、附随的でさえある。第二の攻
撃性はフラストレーションを前提とする反応的攻撃である。多様な独自の
目的から分離され、多少とも独立した存在になりうるのはこの第二の反応
的攻撃だけである。この攻撃を、基本的なメカニズムから捉えて、——た
とえば、生命の防衛において、食べものとか、配偶者の獲得において——
普遍的・生得的な破壊性の表現と見做すことは誤りであろう。いっばんに
あらゆる行動・運動・生活そのものに攻撃の残基 (residues) が含まれる。
子どもの食人的な想定を承認するとしても、これを生得的なサディズムに
還元する必要はない。M・クラインによると、『偏執的姿勢 (paranoid posi-
tion) と呼ばれる生涯の最初の三ヶ月、あるいは四ヶ月間、乳児は最高度
の破壊性・不安・分裂のプロセスに当面するが、母体からの分離の、すな
わち出生経験に対する暴力的反応の一時期にすぎない。この反応には、ギ
ャップを埋め、再結合するための努力が繰り返されるが、その強さは出生
時の最初の分離に際して『愛されざる環境』 (unloving-environment) で
子どもが受けたフラストレーションの強度によるという。

サディズムとマソヒズム両者は失われた人間関係を樹立しようとする、
たえがたいときには挫折感を伴う肉体的・精神的な暴力的企てとあってよ

い。このアプローチでは、E・フロムのすぐれた著作『自由からの逃走』に詳しい。マゾヒズムにおける或る個人の他者への完全な従ぞくは彼自身の孤立性の否定を暗示していることは明らかである。そしてフロムは『マゾヒズム的努力のもう一つの面（孤独感にうちかとうとする消極的な面と並んで——筆者註）は、自己の外部の、いっそう大きく強力な全体の部分となり、それに没入し、参加しようとする試みである。その力は個人でも、制度でも、神でも、国家でも、良心でも、あるいは肉体的強制でも、なんでもよい。ゆるぎなく強力で、永遠的で、魅惑的であるように感じられる力の部分となることによって、ひとはその力と栄光にあやかろうとする。』サディズム的衝動において、他者に対する征服と従ぞくを求めることは、自己と他者との間隙そのものを征服し、従ぞくを求めることに等しい。『私は外部の世界と比較しての私自身の無力感からそれを破壊することによって逃れることができる。もし私がそれをゆり動かすことに成功すれば、私は救い難い孤独感にさいなまれるが、私の孤立は、私自身の外部の対象の巨大な力によって圧倒されなくて済むことができることは確かである。』サディズム攻撃の真の目標は、犠牲者ではなく、触れることもない。破壊されることもない『相異』、『間隙』そのものであり、絶滅されるべきは『他人』のうちの『よそよそしさ』(otherness)である。そしてフロムはサディズムとマゾヒズム的人間が対象を必要するのと同じように、対象を必要とする。ただかれは、抹殺されることによって安全を求めるのではなく、他人を抹殺して安全を獲得する。どちらのばあいも個人の統一は失われる。一方では私は自己の外側の力のなかに解消する。私は私を失う。他方では私は自己を拡大し、他人を自己の一部にするが、そのさい私は独立した個人としては欠けていた力を獲得するのである。他人と共生的な関係にはいろいろとする衝動へかりたてられるのは、自己自身の孤独感に抵抗できないからである。こうしてマゾヒズム的傾向とサディズム的傾向とがまじりあっていることが証明される。それらは表面的に矛盾している

が、本質的には同じ欲求に根ざしている。』

共生の性向は子どもの乳離れの期間、すなわち、種属のもっとも典型的な代表者との最後の身体的な連りが断ち切られるさいにもっともはっきりと現われる。この子どもにとっての絶望的な経験で受ける精神的外傷は、共生の性向への挑戦として十分に説明されるし、精神分析派の性的リビドの概念をもち出す必要はない。第二に肛門的固着 (anal fixation) が何よりも可能になるのは、衛生の文化的水準に依存するだけであって、非衛生社会では肛門的関心さえ発生しないであろう。臨床経験では肛門的関心は母親と子ども種属的關係によって刺戟されるし、顕著な相関を暗示する。第三に生殖器的性 (genital sexuality) の最初の徴候が現われ、生殖器に強い関心が生ずる際に、子どもは生殖器が再結合のための新しい身体的手段・身体的連りを与えるものであることに気がつく。誕生と乳離れが身体的接触に終りを告げて以来、生殖器は共生の欲求の初期の媒介手段への継承者として現われる。そして思春期の性の場合には失われた身体的連りを再建する機会が再び現われ、児童期に特有な口唇的・肛門的機能に性的内容が与えられるわけである。この性的内容は性的以外の形態を——しばしば遡及的に——とり、そして子どもの基本的な一体的リビドの諸力の現われとされるような事態が発生する。いわゆる『偏多形態的性』(polymorphous perverse sexuality)——汎性理論の鍵概念——が適切ではない回路に沿ってその解放的手段を求め、そして最後に生殖器に転換されると想定される。しかし、この曖昧な『偏多形態的性』は二つの基本的な力——共生の性向と生殖器的性——の混合以外の何ものでもない。前者はこの混合のうちの種ぞくの構成要素であり、後に社会的欲求——たとえば情緒的反應を求める欲求——となって現われる。この場合、出生以前の母子関係のうちに存在し、へその緒の切断 (severance of umbilical cord) 後、数ヶ月間続く生物学的一体性から、この社会的欲求が生ずると想定するところから、社会性の基本的・文化的に純粋な形態を生物——社会的衝動の現われ

と考えたい。後者については前生殖器的性の出現と見做す必要はない。前生殖器的情緒関係は生物——社会的であって性的ではないからである。

よく知られているようにフロイドは性の概念と生殖の概念とを生殖的性を暗示する一つのシムボルにすぎないエロス (Eros) と呼ばれるものとする。だが、どのような場合でも、エロスはその意味内容において生命力、生活のダイナミズムの積極面から発生するのであって、拡散し、曖昧な性そのものではない。

したがって、フロイドが次のように語るとき、性的という形容詞に固有な限界を彼自身感じなければならなかったことは興味深い。『本能そのものを私たちは直接理解することはできない。私たちは本能からの派生——性的観念と性的愛着——だけを経験できる。本能それ自身は有機体の生物学的基盤に深く根ざしている。それはテンションからの解放の刺戟剤として感知されるのであって、本能そのものとしてではない。』

だが観念なり愛着が性的であるとしても、すべての観念と愛情を意味しないし、それが派生されるいわゆる『本能』はそのまま性本能になるわけではない。一つの比喩をあげよう。燃料オイルは熱・照明・運動などに使用されるが、オイルのもつ潜在的エネルギーは本質的に熱・照明・運動のエネルギーと同一であると主張するのは誤りであろう。性的観念と愛着の存在は性本能の出現を立証しないし、いぜんとして数多くの観念と愛着がとり残されている。

フロイドよりも自他ともに許している急進的な汎性主義者として知られている W・ライヒも『性は中心から周辺にという拡張 (自我からの超出) の生物学的機能以外の何ものでもない。逆に不安は周辺から中心に (自我への復帰) という反対の方向以外にない。』と語っている。ここでいう自我超出としての性はたんなる空想的観念ではない。これは性が直接立脚しているよりももっと究極的な原則に還元されることを意味している。

だが、もし生殖器的性が本質的に非性的な究局的原理に分解されるとす

れば、何故、前生殖器的な、すなわち口唇的・肛門的などの行動が生殖器的な性を通してこの究極的原則から生ずるのであろうか。そこには社会的原則が近代的精神分析理論の汎性主義のリビド概念から解放されていることを想起すべきであろう。精神分析的アプローチに従事している著名なカウンセラー・W・R・ビオンも、精神医学に対して『集団的な精神生活が、一時的あるいは特殊的な欲求とはまったく別に個人の充足した生活にとって本質的であり、この欲求の充足が集団の人間関係を通して求められねばならない』ことを警告している。

同じようにリビド理論の分析について、ジンズバーグは『精神分析と社会学』のなかで、もしヨリ広い意味がリビド概念に結びつけるべきとすれば、『社会的刺戟は、いわゆるその固有の権利において存在するものであって、転移とが再方向 (redirection) の過程によって狭義の性から生ずるものと見做すべきでない』と述べる。

以上の性的媒介の解釈について、O・ランクは『意志療法』のなかでさらに明快に論じている。『あらゆる有機的進化は分離に依存するこの分離、すなわち誕生の外傷は生命の永久的危機の象徴である。『罪ある』あるいは性の重荷の抗争となって、後にあらわれるものは、種ぞくからの分離についての解決の困難なきざしにすぎない。それは個性化から生ずる罪、他人との相異、もっとも身近かなものからの別離である。『近親相姦の本質は同一家族のメンバーへの性的渴望ではない。この渴望が見出されるとすれば、母親のもつ、もっとも初期の、そしてもっとも影響力のある保護面に子どもが結びつけられたいという、ヨリ深層の、基本的な渴望の唯一の表現である。誕生後の子どもは、なお多くの点で母親の断面であり、分身である。独立した人間としての誕生は、実際には全生涯を必要とするほどの過程を辿ることであり、へその緒の切断は、身体的ではなく、心理学的意味をもち、人間的発達に対する大きな挑戦であり、またもっとも困難な課題である。』そして次のように結論する。『正常な性生活は個人を生物学

的に種に結びつけることによって、この間隙（分離）を埋めるのに十分である。』ここで主張されているのは、フロイド派によっても、充足された性が生物——社会的結合への渴望と自己超出の苦痛の緩和剤（alleviator）と見做されていることである。

だが、小論では性をヨリ第一次的な原則のなかに分解しつくそうとするものではなく、生物——社会性が性に埋没されないことを示すことを課題としている。ここまでの叙述では生物——社会衝動が性的リビドから派生されるのではなく、それは生命のうちの性的原理に対してこれと同様な独立性と基本的特徴をほとんど否定するおそれがあるほどに分析をすすめてきたが、真意はむろんそうではなくて、性の生物学的性格は誰の眼にも明らかである。だが同時に社会性の生物学的特性も明示されねばならない。

人間行動の研究では、古い心理学は人間の基本的衝動を個人的属性から演繹する。たとえば個人は性的欲求を示す。したがってそこには基本的な性的衝動があるはずだとか、あるいは、ひとは危険から逃れようとするが、それでは自己保存的衝動が存在するに違いないとか。このような個人中心の心理学では、個人よりも大きな生物学的実体は存在しないし、生物学的抽象なしには、心理学的実体もありえないという確信に裏づけされている。むろん、このような想定は経験的でない実体を受けとめることを拒否することから生ずる。社会学者ソローキンによると、有機的パーソナリティ論に対する批判は、全体的にみて、この理論自体も批判も、個々の分離した、死すべきものを意味する生物学的な概念に余りにも固執しすぎているという。時間と空間における種の連続性は、生物学的ターミノロジー以外の概念では把握されない現実であったことは理解されなかった。そして、この古い論争以後、近代の社会学は社会的現実を暗に意味する概念を再び導入し、『相互作用』、あるいは『相互作用の網』などの、どちらかといえば個人本位の社会概念にも、個人的生物学、あるいは個人的心理学の用語に転換されない法則が働いていることを暗示している。同時に生物的

実体としての同質的集合（種）の考察，すなわち，社会有機体論は生物有機体の単なる比喩的誇張として止まっている。だが，種のまぎれもない現実をその集合体にかかわりさせ，『集団精神』，『集団表象』，『社会有機体』のような人類形態的・生物形態的な概念を導入しなくても，この現実から特定の法則が生じてくることが考えられるし，また許されるべきであろう。

種ぞくを全体とし把握することは，独断的な抽象ではない。心意・意向とか，何かほかのパーソナリティ特性をその集合性に由来させなくても，種ぞくが種ぞくとして二つの主要な機能を遂行することをまさしく想定することができる。とりわけ，生殖作用によってその連続性を確保することは，ほかの種ぞくと環境に対する防衛と攻撃の砦（とりで）だということを示している。この第二次的機能を摂食・移棲などのようなほかの共生的な営みに置き換えられよう。したがって，ここには種ぞくに生得的である二つの基本的なカテゴリー——これが集合体としてその存在を保護し，生殖が行われる——が存在する。ただ前者のカテゴリーに対し，次のような批判が生ずる。自己保存が個人の営みであり，ヨリ効果的な自己保存のための社会的結合が，その実，個人的活動の単なる集積であり，全体としての種ぞくに関わりがないのではないか。だが，ひとが自己を守るべき当然の義務を放棄し，同邦のための敵と闘って，生命を賭け，犠牲にすべきであると思ひこむばあいは決して珍らしくない。『殉死』がしばしば行われること自体，なぜ『死の本能』の理論が受け入れられるかの理由の一つになろう。生命保存の原理は個人の自己保存とは同一の次元にはない。後者は系統発生上，前者からの派生にすぎない。そして，この生命保存の原理は前述のように本質的には社会的であって個人的ではない。A・コンフォートは『死の恐怖は，おそらく生活経験の終末よりも孤立への恐怖に根ざすものであろう』という。ヨリ分化した多くの種ぞくたちの個人的原理に先立つのは社会的原理である。

そこであらためて、種ぞくの観点からアプローチすれば、二つの基本的な生命原理——社会的原理と性的原理——を見出すことができる。そのいずれにしろ、種ぞくの生得的特性として布置され、それからの孤生・分布、それへの分有・参加によってのみ、個人のぞく性となる。つねに個人化の原則はやがて、この一つの原理にそくして実現されるし、これとの緻密な関連を欠いては、いかなる意味をももたない。すなわち、個人化の原則は長期間にわたる二つの原理を無視しては、実現不能な委託された力そのものといってよいだろう。

アンジールは系統発生 (phylognesis) と存在発生 (ontogenesis) の両者とも、自律性 (autonomy) を増加させ、他律性 (heteronomy) を減少させる傾向を示すのではないかという。だが、この反比例的な発生が個人化を社会化から生ずるかどうかは疑わしい。たとえば、種としてのホモ・サピエンスが深層的な分化を経験するばあい、これに応じて個人の強烈な自律性と独自性が獲得される。しかし、この自律性と独自性は二つの原理の具体化以上の副次的な特性ではない。

この命題の倫理的意味合いは誤解を招きやすい。したがって、自律性の普遍化は系統的発生の現われでも、系統的存続の本質的の本質的条件と云われよう。この自律性の統合は種ぞくの統合性に等しいが、二つの系統発生的な原理に対する同等の地位と潜在性を秘めたライバルの永遠的な現われではない。種ぞくの環境における不可避的な変化は適応を要求するが、個人化の原理は種ぞくによって遂行される適応の永続的な現われである。もっとも効果的な適応は種ぞくによって『承諾』されるが、さもなければ、がんじがらめになって消滅してしまう。したがって、個人化は感覚器官としての生活体にとってと同じように、人間存在にとって本質的である。だが、すべての感覚器官の総合的な機能は生命それ自身にはるかに及ばない。個人化は感覚器官としての種ぞくにとって同じように人間存在にとって不可欠である。したがって個人化は種ぞくの手段であって目的では

ない。

(未完)

参 考 文 献

- W. Trotter, *Instincts of the Herd in Peace and War*, 1947.
- H. Bakwin and R. M. Bakwin, *Clinical Management of Behavior Disorders in Children*, 1965.
- 異常心理学講座, 社会病理学, 1964年.
- A. Kardiner, *The Psychological Frontier of Society*, 1942.
- S. Freud, *Group Psychology and the Analysis of the Ego*, 1922.
- 井村訳, 自我論 (フロイド選集), 1994年.
- O. Rank, *Will Therapy Truth and Reality*, 1945.
- S. Isaacs, *The Social Development in Young Children*, 1946.
- E. Fromm, *the Fear of Freedom*, 1942.
- 自由からの逃走 (日高訳) 1966年.
- W. H. Bexton and W. Heron, *Effects of Decreased Variation in the Sensory Environment*, *Canad. J. Psychol.*, 1954.